

白鳥伝説にふれて

西成 辰雄

019-0504 秋田県平鹿郡十文字町東町1

はじめに

北海道、東北そして国内各地に北方から飛来する白鳥の群れ、その大らかな純白な羽毛の姿は古代から多くの伝説を生んだ。それは東北各地に、特に宮城県、岩手県、福島県そして茨城県などに目立つ。そして数多く存在する白鳥（しらとり）神社、それは東北地方に10社、関東、中部地方にそれぞれ13、26社、更に九州地方に24社と記録されている。白鳥たちが千年前あるいは数千年前、もしくは縄文の時代から飛来していたのではと想定されている。多くの語り継がれた白鳥伝説など、白鳥と人間との共生、人間の化身としての白鳥など白鳥信仰を生んだ。それらを文献、資料を通じて一層の白鳥愛護に役立てたい。

伝説の数々

(1) 天女伝説としての白鳥

その中で多く語られる羽衣伝説は天女にたとえられる白鳥との幸福な関係として、またヤマトタケル（日本武尊）伝説の中では死後に白鳥となって天に翔けゆくと、敬慕や追悼の念として伝えられる。また白鳥飛来に関わる多くの地名、例えば白鳥村（郷）、鳥越、鳥取など、また鳴き声に関わる地名も少なくない。

民間伝承としての「三保の松原」の伝説は、駿河や近江国の古老の伝える伝説として、神女に例えられる白鳥が天から降りて羽衣を松の枝にかけ、これを漁夫が拾い夫婦となり、天女はまた羽衣を取り戻して雲に乗って去るという別れ、あるいは白鳥となって天より降りる天女が水浴するが地元民が羽衣を隠し求婚するが、やがて天女は衣を取って飛び去るという内容で語られる。中国にも晋（しん）の時代（紀元前7世紀～後4世紀）に天女伝説があると言う。そして雲の中を舞うように飛ぶ優雅な天女像が描かれる。周北（山西省）に「一鳥独り去るを得ず婦とす。やがて稲の下にある毛皮を取り飛び去る」など、季節毎に飛来する白鳥への思いとして伝わる。

(2) 穀霊としての白鳥

また白鳥と農耕、稲作との共生の伝説も少なくない。そして白鳥は天からの瑞物として豊作をもたらすという言い伝えが各地にある。例えば最古の民族史と言われ

る常陸風土記（713年）には香取郡の白鳥の里で、縄文早期から北浦の湖水の入江で洪水にあう事も多い地域であったが、初期の農耕時代から白鳥による鳥糞の肥効で豊作を享受したとあり、また、神栖町（かみす）には白鳥神社が祀られ、また更に直線路とみられる銚田町、そして福島県に至って下郷町に白鳥神社が存在している。そして白鳥飛来地には餅草が豊富で、白鳥を穀霊とすると伝えている。

また一方、白鳥飛来の鳥糞による肥効の恩恵と共に食害もみられるという追放の動きもあった。落穂の収穫の減少に対するものであった。しかし白鳥の追放は豊穰を失うとして後には白鳥を崇め保護となり、享保年間には白鳥捕獲売買禁令も出されている。この事は新潟県の白鳥山の地名もある中条町にも及んでいると言う。



図1. 刈田嶺神社の白鳥の石碑，宮城県蔵王町宮（谷川健一，1997. 白鳥伝説・下より）

(3) 白鳥と祭神

更に白鳥伝説に多く登場する祭神としての日本武尊については、宮城県村田町では周辺に沼田、沼辺のある荒川左岸で、もとの堀や池のあった地域（現在は公共用地）に日本武尊を祭神とする白鳥神社があり、東征の折に滞在しその後白鳥化したとの伝説があり、敬慕しその去る姿を白鳥にみたのであろうか。また岩手県南部の白鳥川流域にある前沢町の白鳥神社（白鳥明神社）も日本武尊を祭神としており、死後白鳥となって飛び去ったとの伝説がある。また石清水八幡を白鳥明神にしたとも言われる（安永風土記）。

宮城県刈田郡蔵王町宮（白石川、白石市と隣接）にある刈田嶺（かつたみね）神社は古代から日本武尊を祭神とし、蝦夷征伐に関わり、天明年間（1787年）「白石の産神（うぶかみ）は白鳥大明神にて祭神は日本武尊なり、この中之をもって古（いにし）へより白鳥をとることなし。近郷に白鳥のいる事おびただしき事にて目をおどろかしぬ。」と記されていると言う（古川古松軒、東遊雑記）。蔵王山から流れ白石川との合流点に近い松川のほとりにあるこの社は地元で白鳥様とも呼ばれてきた。そして白鳥を神の使いとして崇め、白鳥供養碑が五基あり、いずれにも2羽の白鳥が刻まれている。寛文13年（1673）から文政11年（1928）の建立である。

1811年に刈田郡には大暴風があり、松並木が数千本倒れたが、領主があやまって白鳥を射ってからとされ、以後、白鳥を守護神としたと言う。白鳥は秋の彼岸過ぎに飛来し、春の彼岸過ぎみ北に去る。この地には白鳥伝説、白鳥信仰が色濃い。刈田嶺神社の伝承には日本武尊が地頭の娘との間に1子をもうけたが、母と子を残して都へ去った。里人たちは成人することを嫌い、白石川の支流に捨てたが、合流点に近く白鳥となって天に飛び去ったと言う。今も児捨川と言われるが恐れから、白鳥大明神として祀ったと言う。また戊辰の役（1868～1869年）の際、白石城主が出陣の旗指物に「日本武尊」と「白鳥大明神」と染めぬぎ、対する仙台藩主伊豆慶邦（よしくに）は槍の代りに竹の先に白鳥の羽を付けて白石城を攻めれば敵は退散するとの逸話も残している。

茨城県大北川白羽村（高萩市）の吉田大明神も祭神を日本武尊としている。また景行記によると、景行天皇の皇子の葬儀で嘆き悲しむ中で、大きな白鳥が飛び立ち海へ向ったが、死後靈魂が白鳥に変身し鎮座したと記述されており、この事は古事記にも出ていると言う。またこの事に関係して河内国、また衣だけを残したとされる伊勢国にも白鳥御陵があると言う。いずれ追悼敬慕の気持が化身である白鳥に抱かれているものと思われる。

(4) 白鳥地名と伝承

全国の白鳥地名を総覧して文献や地名辞書を総合して東北地方に19、関東に17、新潟に3、また中部地方31、近畿地方12、中国地方11、九州26と数えられる。もちろん概数であるが、鳥越（とりごし）の地名も9地区あり、京都府の舞鶴市、白鳥峠等も関わりをもつものと思われる。茨城県土浦地方にも複数の白鳥地名がある。これらは一例に過ぎないが白鳥地名は全国に分布しており、古代奥羽地方には国府多賀

城から陸奥（むつ）国に至る奥州街道があり、ここの駅路に磐井（いわい）駅、白鳥駅、胆沢（いざわ）駅の駅（うまや）があった。すでに当時白鳥地名が存在している。岩手県の前述の胆沢郡前沢町には安倍一族の源頼義軍に抵抗した白鳥八郎則任（のりとう）が白鳥柵（しらとりき）を築いた。また鳥海三郎完任は鳥海柵（とりのうみき）を築いている。

吾妻鏡（文化5年、1185）によれば、白鳥八郎は前九年の役で安倍則任の名と共に北上川に沿って前沢町大字白鳥館を残し当時の要衝の地での館（やかた）の建設を伝えている。白鳥の飛来地であったとみられる。陸奥話記（1062年）に厨（くりや）川柵の名があり、関を破り白鳥村に至るとある。この羽州厨川城に鳥海孫二郎の名があり、衣川柵は白鳥の柵と称して安倍氏の拠点であった。北上川、胆沢川に近い地点に鳥海柵があり、北上川と和賀川と合流する地点に黒沢尻柵があった（現在の北上市）。源頼義は鳥海柵を襲い、厨川柵に及んでいるが、白河市の白鳥神社は安倍則任を祀るものとなっている。

また山形県では最上川河口に近い白鳥谷地（白鳥源右衛門の所有）には寛文年間（1607年）に白鳥飛来地としての記録があり、酒田市大宮村（現大宮町）は白鳥村と称されていた。また福島県では、いわき市常盤白鳥町は藤原川中流に沿っており、早くからの白鳥渡来地と考えられる。そして南、北白鳥村（明治19年白鳥村に）の龍勝寺は白鳥山白鳥寺、そして白鳥庵がある（大同2年、807）また福島市大森村に大森川（旧荒川）に沿って白鳥城があり、城山（標高643m）は米沢城、板谷城につながるものとなっている。また同地の川の西部に上鳥渡村があり、岩手県に至っている。また岩手県二戸郡に白鳥の地名があるが、一戸町には白鳥村、鳥越、似鳥（にたとり）村がある。馬淵（まべち）川中流右岸に位置する二戸市福岡の段丘地には福岡城があるが、「南部の白鳥城」と称され、九戸政実（まさみ）（1569年）が支配した。ま



図2. 十文字町，田園に降り立つ白鳥（撮影：西成辰雄）

た宮城県北上川の分流の周辺は縄文、奈良、平安時代を通しての歴史を持つが鶴波（ときなみ）白鳥村が存在する。近世になって寛永6年（1629）に白鳥の飛来が記録されている。1804年に北上川の洪水で堤防が破壊されたが、当時白鳥20羽が住んでいたと言う。

福島県東和町に白鳥神社があるが、その10km地点の川俣町に館の越、福沢の地があるが、これらは漢字導入前の鳴き声地名に由来すると言う。kukuはフクヒに、あるいはクグイに、また館（たて）はタヅに関係すると言う。語音のghはカフ、コフ、ユヒ、クグなどに変化したとみられている。藤沢市に鶴沼（くげぬま）があるが鶴（こく）はクグヒー白鳥の来る沼の意であり、古代から白鳥の生息地であると言う。福井の地名もクグイ、フクヒから転じたと言われる。徳川光圀（みつくに）の時代、常陸国（茨城県）里見村の八幡宮を白鳥明神としている。常陸風土記には白鳥の里として

「白鳥ありて天より飛びきたり、夕に上り、朝に下る」とあると言う。1114年、安倍高任は常陸国へと移り、白鳥十二郡を領したが、その子光任は白鳥太郎と称したと言う。常磐白羽町（いわき市）の黒川の左岸に天志良羽（あめのしらは）神社があり、祭神は天白羽命（のみこと）と言い、延暦14年（765）延喜式に記されていると言う。天保15年（1844）の新常陸国誌には白羽、田渡（たわたり）の地、白羽明神の記載がある。先の前九年の役に関係して、安倍貞任の二男高星（たかあき）丸は孤児となったが、当時（1062年）衣川では8万人が討死したとされるが、高星丸も脇差しを持ったが乳母に止められ、十三湊へと逃れる。後に君主高星丸は仇討ちを志すが、敵源氏の密通者と考え城外で斬らせた際、白鳥の群れがやぶ陰から出て飛び立ち、クオウ、クオウと雪の上の遺体の周りでもくちばしと羽を広げて下手人を追い払い、遺体を奪って旋回しながら白い雲の中に空高く去ったと言う。それは白い衣の天女に守られる仏のように、一気に館の上を北へと去った。雪は白鳥の化身のようにも思えた。高星丸は若気の至りと白鳥狩りを禁じ淵崎域を白鳥城と改めた。そして岩木川には白鳥の多くの飛来をみると言う。伝説ともなった白鳥城神話である。また秋田県横手市の北部に大鳥（鳳）の地名があり、古代清原氏の居城のあった場所として知られるが、通称「鳥っこ山」と言われる横手川に近い丘陵地となっている。

まとめ

白鳥伝説は各地で多くの伝説を生み、伝承されまた逸話として存在してきた。それはまた地名や有力者の人名に及び、また捕獲で減少した時期があったとしても、多くは白鳥信仰と共に保護され祀られもしてきた。その白い雄大な姿、それは人間の心を捉えずにはいられなかった。季節に飛来する白鳥、それは共に飛来する「白き大鳥」と言われる鶴や鴻の鳥、白鷺また同じ目、科の雁、鴨などの中で、ひときわ伝説を生むにふさわしいものであった。このたび日本白鳥の会意の総会が開催された福島市飯坂温泉でも茂庭（もにわ）地区に白鳥神社が存在し、1193年に建立されたものと言う。この奥にある菅（すげ）沼に現れた大蛇を退治する折、白鳥が現われ助けられたと伝えられる。遠隔の地から渡り鳥として飛来する白鳥、その今も継続する自然の姿は、私たち人間にとってまた未来の子どもたちにも貴重なふれあい、自

然愛にもつながるものである。それは北歐など地球の広い土地にも飛び物語を生んできた。日本に伝わる白鳥伝説、これを現在の白鳥の生態、保護と共に、その歴史も知りながら貴重な自然の中のふれあいとして役立てたいものとする。

(平成11年度研修会で報告)

参考文献

谷川健一，白鳥伝説（上・下）．1997．小学館ライブラリー，東京．

芦野泉，1994．白鳥の古代史．新人物往来社，東京．

平凡社，1990．大日本地名辞典（各県）．平凡社，東京．

谷川健一（編），2000．日本の神々（神社と聖地）．12．東北，北海道．白水社，東京．

長尾まり子，1988．白鳥城物語，長尾美術研究所，館山．